第16号
2017. 12

青梅のにじ

〈発行〉
日本基督教団 隠退教職ホーム　〒198−0052　東京都青梅市長淵2−687
にじのいえ信愛荘　電話：0428−22−2283　FAX：0428−22−2317
運営委員会　須藤　繁　Eメール：nijinoiesinaiso@wish.ocn.ne.jp
振替口座番号 00120−3−358467
加入者名：にじのいえ信愛荘

心を高く上げて

にじのいえ信愛荘運営委員会委員長
須藤　繁

日ごろ、「にじのいえ信愛荘」のためにお祈りくださっている皆様、この荘のためにご献金、ご寄附を捧げてくださっている皆様、また、荘の運営に様々に関わってくださっている皆様、その尊いお志しに心から感謝をいたします。皆様のお支えにより、荘では現在20名の荘員の方々が、深山荘長以下の忠実な職員に支えられて、事故もなく、平安の内に日毎礼拝を捧げる生活を続けておられます。

運営委員会の私達も、様々の分野の知恵を集めて荘の平穏な運営に努力してまいりましたが、今回思いがけなく私がこの運営委員会の委員長の役を務めることになりました。現在、荘には老人施設として青梅市や東京都から種々の規制がかかり、消防署からは消防施設の要望が出され、労働基準局からは職員の労働時間や賃金等について、法遵守を迫られるという状況にあります。また、荘内部でも、入退荘など諸手続きの明確化や、高齢化による終活の必要等が課題となっております。これらは、今までのキリスト教の施設等での、すべてを奉仕の精神でというような在り方が、もはや難しい時代になったことを示しています。

私は弁護士であった時に、荘員の方の詐欺被害をきっかけに委員となったのですが、弁護士を退職した今、この状況の中でもう少しお役に立つようにと、神様から命じられた思いでおります。

ただ、荘を取り巻く規制や要望が多くなればなるほど、それに応えるためには、単に荘側の制度上の不備を整えるだけでは済まず、相応の資金が必要になってきます。しかし、この「にじのいえ信愛荘」は行政からの補助金はもとより、日本基督教団からも資金援助を受けておらず、専ら皆様からの献金や寄付金などで、その運営資金の殆どの部分をまかなってきましたが、これが先細りとなってきました。ですから、新たな経費をねん出する余裕は殆どないのです。

そこで、運営委員会では、募金小委員会を中心に資金集めに一層知恵を絞り、経費の節約にも力を入れておりますが、資金的には今年度も極めて厳しい状況にあります。そこで皆様には、「にじのいえ信愛荘」が、その使命を全うし、先生方の祝福に満ちた住処となるように、お祈りと資金的なお支えを心からお願いしたいのです。

私達は、「にじのいえ信愛荘」が、主の尊いご用に生涯を捧げられた先生方、そしてその労苦を共にされたパートナーの方々の、平安で祝福に満ちた施設となるよう、これからも主のみ旨を求めつつ、全力を尽くしてまいります。

謙虚に　進みゆきたい
弱さを　自覚しつつ
ゆく手は　なお遠くても
心を高くあげよう
讃美歌21・520番3節

皆様の上に、主の御祝福が豊かに注がれますよう心からお祈りいたします。

クリスマス

この身に神の言葉が

隠退教師　椿　憲一郎

私が好きなクリスマスの讃美歌のひとつは１９５４年版『讃美歌』１１５番である。作詞は、フィリップス・ブルックスで、彼は一九世紀のアメリカが生んだ不世出の説教者であった。エピスコパル（監督）教会（日本の聖公会系）の教職であったが、その説教は全米だけでなく、ヨーロッパまで広く知られていたという。

神学校の寮で、棟居勇君の本棚にブルックスの伝記を見つけて借りて読んだ。その清潔な生涯と温かい人柄に感激したことを今でもよく覚えている。

ブルックスの歌詞も素晴らしい。彼はクリスマスにパレスチナ旅行をしてベツレヘムを訪れた。その時の印象から讃美歌１１５番が生まれた。

「ひとみな眠りて　知らぬまにぞ
　み子なるキリスト 生れたもう」

「しずかに夜露の　くだるごとく
　めぐみの賜物　世にのぞみぬ
　罪ふかき世に　かかるめぐみ
　天より来べしと　たれかは知る」

詩人の想像は事実であろう。最初のクリスマスは鳴り物入りのお祭り騒ぎではなく、静かであった。神の子は人間が期待したり想像したりする方法とは全く違う仕方で、人間の世界においでになった。静かに夜露がくだるように人間世界にこられた神の子ではあるが、しかし、彼は決して人間の心を無風状態にしておかれたのではない。神の子の誕生によって、人間はみ子に対する態度決定を迫られたからである。

「彼（神の子）は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。」（ヨハネ福音書１・11　口語訳　以下同じ）。「客間には彼らのいる余地がなかった」ので、生まれたばかりの主イエスは「飼葉おけの中に」置かれたのである（ルカ福音書２・７）。人間が神を神と思わず、神の子が存在すべき場所を占拠して生きている人間世界のただ中に、神の子は来られたのである。

マギの礼拝　渡辺禎雄版画

ヘロデ王は新しい王の誕生を聞いて不安になり、民衆も不安になった（マタイ福音書２・３）。自分の場所を明け渡さなければならなくなり、自分を世界の中心とする傲慢な心を捨てなければならないからであった。

しかし、その頃、世にこられた神の子を歓迎した少数の人々がいた。中でもマリヤは際立っている。聖霊の不思議な働きによって「神の子の母」として選ばれた。彼女は戸惑いながら、困惑し恐れつつも、謙虚に従順に神の働きかけを受け入れ、神の子主イエスを迎え入れた。「お言葉どおりこの身に成りますように」（ルカ福音書１・38）というマリヤの信仰告白に同意する者たちは、神の子イエス・キリストを迎えるにふさわしい人々である。

ビートルズは「レット・イット・ビー」（そのとおりになるように）と歌ったが、このマリヤの信仰告白の前半だけを取り入れた。「この身に」を省いている。しかし、マリヤは、神の言葉が、他ならぬ「この身に」（私自身の中に）実現するようにと告白したのである。これは、クリスマスを祝う私たちの信仰告白でもある。

「おお、ベツレヘムの　きよきみ子よ、
　われらのもとに　くだりたまえ。
　われらの罪を除き、今日こそ
　われらの中に生まれたまえ」
（ブルックスの原詩より）

山添　和加

私がはじめて「和歌」に接したのは、小学2年生ごろでしたか、お正月に「百人一首」を家庭で楽しんだときでした。意味もわからぬままそらんじて、言葉のリズムが良くて楽しく思いました。

〝秋風に棚引く雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ〟など、今でも変わらぬ美しい歌と思います。

時を経て2003年に岩槻教会に転会し、岩槻短歌同好会に出席しておられる方のお誘いで、はじめて短歌を身近に学ぶときを与えられました。

人生の途上で感じる喜び、悲しみ、美しさなど、さまざまな思いを歌にすることを自分もやってみたいと思うものの、本格的に取り組むことなく時が過ぎました。「とらわれずのびのびと」という先生のご指導と、楽しい交わりと、一ケ月毎の歌会と同人誌への投稿によって続けてまいりました。

荘の庭に秋明菊の群れ咲きて
白い花々空にゆれいる

礼拝を終えて朝食のあたたかき
御飯と味噌汁の湯気立ちのぼる

夕暮れに残照美しくかがやきて
雲がたなびく金色の空に

近隣の小学五年のクラス皆で
元気いっぱいリコーダーの合奏

児童らはホームの人に寄り添いて
肩をもんだりたたいたり

漫然と机の前に座しいる吾
地球は自転し時は過ぎゆく

核兵器廃絶の道は遠くとも
強き思いをこめて祈らん

異国に暮らせる吾子より電話来ぬ
「母さん元気？誕生日おめでとう！」

（にじのいえ信愛荘　在荘）

わたしの 短　歌

柳沼　齊子

猪苗代にて

晴天の雪道ゆっくり歩みきて
猪苗代湖の風を聞くなり

大勢の無辜の人らの名が残る
キリシタン碑あり桜並木に

風雪に耐えて一樹が枝を張り
縄文を語る形相の松

福島原発事故にて、避難

セシウムの基準値超えし山菜は
好みし人の寄るをゆるさず

遠目にも華やぎ見ゆる紅葉の木
長き不在の家に燃えつぐ

二〇一五年　クリスマス

盤上を殊まろぶ如かろやかに
ピアノ弾く子は笑顔を見する

健やかに白寿をこえたる教友は
背筋伸ばしてみ堂に座する

遣わされ猪苗代にて二十余年
老を極めて謝して去り行く

にじのいえ信愛荘にて

入荘の吾にやさしく触れくるる
祈り援けくるる柔かきゆび

ルーペ持ち辿る机上の文語訳
若き日読み継ぐ赤線しむる

今しがた心をよぎりし聖言葉を
味わい過ぐる宵の静けさ

二〇一六年　クリスマス

静かなる聖誕の恵み耳朶に残り
十指やわらに鍵盤はしる

新職員えみをたやさずメモ帳に
ペンを泳がせ荘内めぐる

去年までは歩けし道を遠く見て
芒にふれつつ夕焼けに会う

中秋の風渡りくる夕暮れに
かなかなの声木々を濡らせり

（にじのいえ信愛荘　在荘）

にじのいえ信愛荘と私

パート職員・看護師
金井　弓子

私と「にじのいえ信愛荘」との関わりを振り返ってみました。

西東京教区が西支区と呼ばれていた時、〈注　1999年3月末迄〉アジア学院をお借りして、西支区主催中高生キャンプにボランティアとして参加しました。そこで片倉教会の故福田和子様に声をかけられたことが始まりで、館山にある「にじのいえ」の繁忙期にお手伝いをすることになったのです。当時、私事ですが、癌を患っていた妹は、ターミナルステージでした。妹からの看護の要請もあり、私は国立療養所多摩全生園看護部を退職しておりました。自由な時間をボランティアにも用いたいと、救世軍清瀬病院ホスピスや、矯風会などでのボランティアを許されている時でもありました。

「にじのいえ」は、小綬鶏のかん高い鳴き声で毎朝起こされ、2階ベランダからは、青い海、白い雲、遠くに大島が見え、玩具のような船が点々と浮き、さながら一枚の絵のようでした。

その千葉県館山を7年前離れ、多摩川の源流をみることのできる、ここ青梅に、車椅子利用の小旅行の様にして、5名の先生方と1名の職員の生活の場を移動するお手伝いをいたしました。

一昨年5月、胃癌全摘出手術をして19年目の夫を、天に送りました。その歳月は長くも短くも感じられ、疲れという表現でもなく空虚とも違う、私でないような状態の日常でした。その時、飯澤弘子運営委員よりお電話をいただきました。現在週2日宿泊し、荘での多忙な日々をご入荘者と共に生活をして、2年が過ぎようとしています。

現在様々な老人ホームがありますが、他とは違う自立された先生方の集団生活の場です。『何が違うか』と問われたら、当然のことながら、来る朝毎に祈りで始まる共同体であることです。

たくさんの祈りに支えられ本当に感謝です。同時に、荘の方々は日ごと夜ごと祈っておられること、このことが大きな違いです。老いてなおさら、他者の痛みに共感し祈り続けられる共同体であると感じております。

（西東京・東久留米教会員）

時の流れの中で

パート職員
高橋いそ子

私は昨年1月よりパートとして働いている者です。

12年程前、長年管理人と寮母をしていた菅原夫妻が退職することになり、次の高橋夫妻が着任するまでの一年余りを、引継ぎ手として働いていました。その頃、荘の運営は丁度節目を迎えていました。荘員の高齢化、介護保険の変更と利用者の増加、終の住処としての施設のあり方が問われていました。また、建物の老朽化に伴い風呂装置、別館のボイラーの更新、別館個室のリフォーム等、厨房ではガス釜の故障で朝ご飯が炊けず、近くのコンビニへおにぎりを買いに走ったこともありました。その間の横山荘長と飯野主事の働きとご苦労は大変なものでした。

2005年9月に、「にじのいえ」より委員と職員の方が来荘し見学と懇談の時を持ったのを、印象深く覚えています。

その後、「にじのいえ」と「信愛荘」は合併し、教団唯一の隠退教職ホームとなりました。住居も新しくなって整備され、食堂も厨房も快適な場所となり、多目的ホールは交流の場として荘の中心となっています。

この原稿の依頼があり、荘に綴られている「青梅のたより」1号（1972年）～70号（2009年）、合併して「青梅のにじ」となった創刊号（2010年）～15号迄、感慨深く読みました。私の一番の驚きは個人的なことなのですが、1974年6号に、私が働いていた原市教会赤心幼稚園園長のコメントがあったことです。クリスマスに、子ども達の献金と母の会より小包を送っていたのです。綴りの中には、献金報告書がずっしりと重ねられ、祈りの結晶が詰まっていて、胸が熱くなりました。

少子高齢化の時代を迎え、特に過疎化が進む地方で、伝道に励む先生方のご苦労を思います。疲れた羽を休める場所として、神がたてられたこの「にじのいえ信愛荘」が豊かに用いられますようにと、切にお祈りいたします。

「にじのいえ信愛荘」で皆様と過ごす日々を心より感謝し、いつも神様の声を静かに聞きたいと思います。

（西東京・久我山教会員）

Essay

植物物語〈荘の庭Ⅲ〉

横山　利江

○すみれ二株

特別な訳もなく、昔々読んだ小説を読み返した。川端康成の「古都」であるが、その冒頭の一節に、庭のもみじの古木の幹にすみれの花が咲いたのを、主人公の娘が見つけ「ああ、今年も咲いた」と見上げる場面がある。ページを繰りながら読むうちに、ふと、すみれは荘の庭にもあった筈、どの辺りだったかしらと思い立ち、庭に降りてみた。

B棟南側、レンガで囲った4つの花壇の片隅に、二株のタチツボスミレがひっそりと、緑色のハート形の葉を茂らせていた。

コンクリートとレンガの隙間に種が落ちたのだろうか、土も十分でないのにその根付き方の強さに驚く。「こんなところに！」としゃがみこみ、葉を分けて根元を見ると、びっしりと小さく丸っこい蕾と思しきものがついている。

今、季節は秋であり花が咲く筈はない。調べてみると、『スミレは開花の春を過ぎ再び蕾をつけるが、咲くことはなく閉鎖花といって、花を付けずに受粉し子孫を残していく』とあった。

その後折々に見続けていると、10月半ば種が実り弾けていた。

本にある通りで、小さな発見であった。

冒頭に記した小説の主人公は、捨て子という運命を負いながら、素直に清楚なすみれのイメージが漂う娘として描かれている。

庭のすみれ二株を冬の間ずっと見守りたいと思う。

○スベリヒユの煮物

厨房の加藤房子さんが、日毎のメニューに添えて野草のスベリヒユ（滑り莧）を、一品の物菜にして供してくださった。

いったん塩漬けにして干したスベリヒユを、戻して塩抜きをし、さらに、あく抜きを丁寧にしたものを、油揚げや、人参、糸こんにゃく等と炒め、だし、醤油，みりんで味を調える。ご飯によく合う何とも懐かしいお

ふくろの味であった。山形県では「干しひょう」と呼び、食材として好まれているという。

「スベリヒユ？」と思われる方は松葉ボタンを想像してほしい。赤みを帯びた茎、小さな丸い葉、地べたを這うように広がってゆく、どこにでもある野草である。

園芸種のポーチュラカは、ハナスベリヒユとも呼ぶ。

○野の花の装い

「にじのいえ信愛荘」は本当に静かな環境で、ここに身を置くと「今迄なぜ見過ごしてきたんだろう」と、自ら問わずにいられないことが多い。植物達が命を繋いでゆく有様が、なんと厳粛に感じられることか。どの草も、花も、木も、神様から深い知恵をいただき、特に見えないところでの大きな不思議な力に満たされ、ただひたすら黙し、置かれた所で粛々と生きている。

「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。」（マタイ6章30節）

その命の営みのすべてを含む野の花の装いであるのだと感じる。

（にじのいえ信愛荘　在荘）

近況報告

荘長　深山　祐

【感謝】主なる神のお守りと、多くの方々の不断の祈りに支えられておりますことを覚えつつ、感謝をもってご報告いたします。

【奉仕】第一月曜日午後、食堂で、阿佐ヶ谷教会をはじめとする西東京教区の諸教会からの編成チーム「お茶の会」が、ご用意くださるお菓子と交わりのひと時。

毎年、多目的ホールに入りきれないほどの方々が来荘し、バザーと交わりの時をもってくださる全国教会婦人会連合。ほか、お名前を列挙できませんが諸教会、団体の、それぞれの個性溢れるご奉仕と祈りの励ましに心から感謝御礼申し上げます。

荘は、新たに、松本明子隠退教師を加え、現在荘員20名です。

【天の都を目指す共同体として】元荘員のお二人の牧師方を、荘全体として天にお送りしました。

黒田愛子牧師の納骨　昨年6月8日死去され、ご遺志による献体を終え、遺骨を8月17日、出身教会、米沢興譲教会納骨堂「希望ヶ丘」の御夫君の傍らに納めました。

石坂幸雄牧師天に送る　9月23日朝、多摩リハビリテーション病院にて89歳で死去。直ちにご遺体を多目的ホールに移し、同日午後1時、荘員と納棺式。大夫人も青梅白寿苑から駆けつけ暫しの別れの時。25日朝9時、青梅火葬場にて火葬。同日、午後3時より多目的ホールにて葬儀。大夫人をはじめ、御親族、荘員、荘関係者、師が半世紀に及び仕えられた水戸自由ヶ丘教会から、4名の方々も加わり総勢60名にて見送る。詩編84編より励ましを受け、教会と荘を代表して、お二人から思い出が語られ、最後に、御親族を代表し実妹、丹下千代子姉のご挨拶。10月22日午後、小平霊園にある「基督者之墓」にて東京・西東京両教区主催の秋季墓前礼拝にて納骨。3名の荘員が参列。

【主に感謝】荘員であった方々が他施設に移られた後、地上の使命を全うし天父の許に召された牧師方を、《荘全体》としてお見送りができたことは、ただ、主の憐れみとお支えであったことを感謝いたします。

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでしたが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ……」。（ヘブライ11・13）。

にじのいえ信愛荘　在荘の皆さま

◆自己紹介

聖霊に打たれて

松本　明子

夜中に目が覚めた時、温かく平安な思いが湧いて来た。今まで経験したことのない心の安らかさだ。「にじのいえ信愛荘」に来て6日目だ。

以前T姉にこの施設の維持はどうなっているのか聞いた時、彼女は「献金よ」と。「何時までするの？」「永遠よ」と答えられて、私はびっくりすると同時に、何と大胆な素晴らしい計画をされ、実行されたものだと衝撃を受けた。今、私がここで経験している平安は、全国の方々の熱い愛の祈りによるものだと気付き、感謝の思いで一杯になった。

今日に至るまでには困難や苦難もあったことだろう。それらを乗り越えて今日も将来も、主と共に前進されるのだろう。私はその愛の中に加えられたこと、感謝と幸いで一杯だ。

溝ノ口教会に仕えていた時、夏休暇を館山の「にじのいえ」で過ごさせていただいた。

主人の召天後、自分の身の振

り方を考え、行き詰まって白子の家でミイラになると決めた時、急に「にじのいえ信愛荘」を思い出し、入所をお願いしたところ、あっという間に入居が決まった。

溝ノ口教会の方々は、至らない私を心配して祈ってくださり、私の入荘にほっと安心されたと伺い、教会の兄弟姉妹方に私は心から感謝している。今、私はとても幸せである。

チャリティコンサート報告

西村　佳子

世界的にご活躍のヴァイオリン奏者久保田巧氏は、青年時代西東京教区にある相愛教会で過ごされ、現東京教区議長の岸俊彦先生（経堂北教会）とも親交があり、そのようなことから、このたび出演を快諾してくださいました。

また珍しい企画で「パイプオルガンとの共演を」と、ご友人の室住素子氏を推薦していただき、10月21日（土）、青山学院ガウチャー礼拝堂にて開催の運びとなりました。

来場者520名の方々からは、異口同音に「素晴らしい演奏！」との讃辞をいただきました。プログラムはバッハ、モーツアルト、ベートーベン、クライスラーと進み、終わりに数曲讃美歌を奏で「いつくしみ深き」を共に歌い、心がいっそう和みました。

「どうして、あのような素晴らしい音色が出せるのですか？」との問いに「これが良いから。」とご自分の楽器を指して、にっこり微笑まれた久保田巧氏。お二人の演奏家に、これからも神の祝福が豊かにあるようにと心から祈ります。

今年度も皆様のご協力を得て、約130万円前後の献金を捧げられることに感謝し、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（募金小委員会委員長）

「にじのいえ信愛荘」ご入荘へのご案内

教団センター「にじのいえ信愛荘」は、豊かな自然に恵まれた東京郊外の青梅市にあります。

長く伝道牧会に尽くされた隠退教師と配偶者の皆様が、神の家族として、祈りに満ちたご生活を過ごしておられます。毎朝の礼拝と食事を共にする以外は、自由な時間があります。また、荘訪問者や教会との交流やお茶会もあり、お花見など自然を楽しむ行事もあります。

25名ご入居可能ですが、現在20名で、空き室が夫婦用、単身者用とあり、ご入荘をお待ちしています。ご入居の場合には、「身の周りのことが一人でできること」等の条件がありますが、入荘後に身体の不調が出てきた場合には、病院の送り迎えをはじめ、スタッフが誠心誠意お世話をし、近隣病院との連携も密にしています。介護保険によるサービス利用も可能です。現在、月額は食費・光熱費を含め7万円（新館）、6万5千円（旧館）です。ご相談や詳細は、ご連絡（☎・FAX・e-mail）ください。

維持献金・クリスマス献金のお願い

「にじのいえ信愛荘」のため、いつも皆様のご理解とご支援をいただきまして感謝です。

今後も継続的に維持管理していくために、皆様からの維持献金とクリスマス献金のご協力をよろしくお願いいたします。

○事務局には振替用紙と専用の献金袋（個人用）を用意していますので、ご利用の上、教会でまとめてご送金ください。

○献金額などで不審点などがありましたら、事務局までご連絡ください。

○献金者の中で、ご召天、転居、転会、中止の場合には、ご面倒でも、ご連絡（メールも可）いただけると助かります。

振替口座番号
00120-3-358467
加入者：にじのいえ信愛荘
TEL 0428（22）2283
FAX 0428（22）2317
Eメール
nijinoiesinaiso@wish.ocn.ne.jp

荘日記

施設長　松村　誠一

●2017年5月
1日(月)お茶会(22名)
8日(月)イースター反省会
10日(水)東村山教会来訪(9名)
11日(木)スタッフ会
12日(金)会計監査
18日(木)井上医院往診、B棟風呂照明取り替え工事
24日(水)運営委員会
25日(木)鑑賞魚の水槽撤去
29日(月)相談会

●2017年6月
5日(月)お茶会(24名)
9日(金)スタッフ会、めぐみ幼稚園母の会来訪(5名)
11日(日)花の日河辺伝道所との合同礼拝(47名)
13日(火)相愛教会来訪(10名)
15日(木)井上医院往診
17日(土)菖蒲公園見学(5名)
19日(月)第2回菖蒲公園見学(8名)
22日(木)井上医院往診
26日(月)誕生会・相談会
　地下タンク検査
30日(金)南三鷹教会来訪(14名)

●2017年7月
3日(月)お茶会(26名)
6日(木)防災訓練(21名)
12日(水)スタッフ会
14日(金)風呂定期点検
20日(木)井上医院往診
27日(木)運営小委員会
31日(月)誕生会・相談会

●2017年8月
1日(火)小泉富子師1ヶ月間滞在
9日(水)スタッフ会
11日(金)安間兄フルート演奏会(19名)
17日(木)黒田愛子師納骨式(深山荘長・飯澤委員・横山姉参列)
19日(土)給食改善会議
24日(木)井上医院往診、運営委員会
28日(月)誕生会・相談会
29日(火)霊南坂教会オリーブ会来訪(10名)

●2017年9月
4日(月)お茶会(32名)花小金井教会来訪の7名も合流
7日(木)スタッフ会
21日(木)井上医院往診
23日(土)元荘員石坂幸雄師召天
25日(月)誕生会・相談会、石坂師葬儀(於にじのいえ信愛荘)
30日(土)松本明子師入荘

●2017年10月
2日(月)高円寺教会来訪(7名)
　お茶会(23名)、庭の手入れ
4日(水)財務小委員会
6日(金)全国教会婦人会連合来訪(41名)
9日(月)井草教会来訪(9名)
12日(木)スタッフ会・説明会(須藤委員長他)
18日(水)防災訓練(18名)、第一回クリスマス委員会
19日(木)井上医院往診
21日(土)チャリティ・コンサート(荘員6名)
22日(日)墓前礼拝(荘員3名)・故石坂師納骨式
23日(月)A棟風呂改修工事28日完了
28日(土)東支区壮年委員会来訪(7名)
30日(月)誕生会・相談会
　荘では、毎朝の礼拝(司会は荘員の持ち回り)を守るとともに、主日礼拝を守っています。そのことを荘員の皆さんは大変感謝しておられます。この6ヶ月間礼拝説教をお引き受けいただいた先生は左記の通りです。感謝してご報告いたします。
　原則として、1週は清瀬弘毅師、2週は椿憲一郎師、3週は渡辺正男師、5週は辻哲子師、のほか飯沢忠師、飯田瑞穂師、深山正子師、吉川幸子師、井柳福次郎師、大崎敬子師です。

あとがき

アドヴェントを迎えました。感謝して第16号を全国の教会・読者の皆様にお届けします。

「わたしの短歌」では、お二人とも趣味として長く短歌に親しまれ、柳沼齊子さんは、信仰の証しを短歌で表してみたいと動機を教えてくださいました。

また、働き人の金井弓子さん、高橋いそ子さんには、荘への思いを自由に語っていただきました。

(成松三千子)

編集委員会
長・成松三千子(柿ノ木坂教会)
石井泰子(小松川教会)
岸　俊彦師(経堂北教会)
黒沢咲子(下谷教会)
阪口和美(神奈川教会)
鈴木功男(目白教会)

お詫び申し上げます。

前回第15号の全国発送の際には、不手際が多々ございましたこと、そのためにご迷惑をおかけしました教会、個人の皆様に、深くお詫び申し上げます。